

前置詞の選択の原理について — 語はどの前置詞を伴うか

小 川 明

0. 英語を運用するために必要な言語知識において、前置詞が占める役割は、普通考えられている以上に大きいのではないかと思われる。例えば次の文を観察してみよう (Hornby (1956) による)。

- (1) a. We congratulated him on his success.
- b. They accused him of stealing the jewels.
- c. He spends a lot of money on records.
- d. What prevented you from coming earlier?
- e. I explained my difficulty to him.
- f. Add these vegetables to the stew.
- g. Compare the copy with the original.
- h. She reminds me of her mother.

これらの動詞を使用する時、それが伴う特定の前置詞を知っておく必要がある。たとえば、congratulate...on...のように。

英語を外国語として習得する時、私自身は前置詞の重要性を強く感じる。この印象を裏付ける言説がある。Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1983: 250-251) によると、英語を外国語として教える ESL/EFL の教師は、学生にたいして一番教えるのが困難なのが冠詞で、その次が前置詞であると感じている。その根拠は、第1に英語の前置詞によって担われる情報が違う手段によって担われる。ドイツ語、ラテン語、ロシア語などにおいては名詞や形容詞の屈折によって担われる。日本語では位置が違う後置詞がその役割

をはたす。第2に、前置詞を持つ言語を比較すると英語の前置詞の数の方が大抵多い。例えばスペイン語の *en* という前置詞に対応する英語の前置詞は *in*, *on*, *at* と3つもある。第3に、違う言語の前置詞どうしがきれいに対応しているわけではない。例えば、英語 *to* = ドイツ語 *zu*、英語 *at* = ドイツ語 *an*, *in*, *bei* のように対応することが多いが、*John is at home.* = *Johann ist zu Hause.* になる。また英語 *to* = フランス語 *à*、英語 *for* = フランス語 *pour* のように対応することが普通であるが、*a glass for cognac* = *un verr à cognac* になる。なお Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1999: 250-251) 2版ではこの部分の説明が簡略化されている。

Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1983: 250-251) は、このような例を見ると、きわめて予測不可能で言語に特有な使用方法が存在することがわかるが、それらの言語間の問題には、深入りせず、英語の前置詞の問題に集中することにすると述べている。もちろんそこでは著書の性質上そうせざるをえないのであるが、一般的には、外国語教育という立場から考えると、学生の言語と学習しようとする言語の間の差および類似性を問題にすることは、とても重要と思う。そして調べていくうちに、見かけほど予測不可能ではなく、その言語にとっての特有の使用方法は、その言語の体系そのものから必然的にでてくるという可能性がある。個別例でなく言語全体を視野にいとかなり予測できる可能性がある。この言語間の問題については、紙幅の関係で別の機会に考えてみることにしたい。本稿では英語の前置詞に限ることとする。

推測にすぎないが、一般に英語を母語とする言語学者はそれほど前置詞の重要性を強く感じないのではないか。あまりにも自然な知識なので問題にしにくいのではないか。たとえば、語彙項目の情報として PP (前置詞句) だけでは不十分なことが多い。P (前置詞) がある特定の前置詞であることを示さなければ、英語を母語とする人の言語知識を表してはいないことになる。単に前置詞句を取ることだけでは十分ではない。違う言い方をすれば、私達が英語を学習するとき、P が何であるのか知ることが必要であって、知らな

ければ英語を母語としてして用いている人と同じようには使えるようにはならない。

1. そこで本稿では、ある語がどんな前置詞を伴うのか、前置詞の選択の問題について調べてみたい。まず(1)のタイプ以外に前置詞の選択が問題になる場合を順に挙げてみよう。はじめに、動詞のすぐあとに前置詞がくる場合がある。この場合も前置詞はたとえひとつではないにしても、決められている。もし異なる前置詞を伴えば、意味は普通異なる。

(2) apologize to, consent to, collide with, correspond with, depend on, hope for, look at, object to, respond to, sympathize with, wish for
もちろん(2)と対立して、前置詞を伴わない動詞(3)、どちらでもよい動詞(4)がある。ただし取るか取らないかで少し用法やニュアンスが変わることがある(cf. 吉川(1955))。以下の例において、()はなくてもよい任意の要素を示す。

(3) break, change, clean, gather, give, hand, purchase, raise, sell, set, smash, twist, wrinkle,

(4) cross (over), depart (from), escape (from), fight (against), hit (at), investigate (into), meet (with), touch (on),

それゆえ動詞は直後の前置詞に関して、(2), (3), (4)の3つに分類できる。そして伴う場合は、(2)と(4)が示すように特定の前置詞が選択される。動詞が前置詞を取るか取らないかということが、動詞の持つ意味からかなり確実に予測できることは、小川(1999)で論じた。

2. 次に動詞の派生名詞が伴う前置詞について調べてみよう。前置詞を伴う動詞(2)と(4)は、次の(5)(6)から明らかなようにその派生名詞も同じ前置詞を取る。

(5) a. apologize to	apology to
b. coincide with	coincidence with

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| c. harmonize with | harmony with |
| d. long for | longing for |
| e. object to | objection to |
| (6) a. attend (at) | attendance at |
| b. depart (from) | departure from |
| c. enter (into) | entrance into |
| d. investigate (into) | investigation into |
| e. penetrate (into) | penetration into |

一方前置詞を伴わない動詞 (3) の派生名詞は of を取る。

- | | |
|---------------|-------------------|
| (7) a. create | creation of |
| b. delete | deletion of |
| c. destroy | destruction of |
| d. purchase | purchase of |
| e. transport | transportation of |

しかし動詞が前置詞を伴わないにもかかわらず、その派生名詞が of 以の前置詞を取る場合がある (cf. Ito (1991); 小川 (1999))。 (7) と (8) を区別する意味的要因については、小川 (1999) で述べた。

- | | |
|---------------|----------------|
| (8) a. admire | admiration for |
| b. damage | damage to |
| c. demand | demand for |
| d. help | help to |
| e. like | liking for |
| f. need | need for |
| g. resemble | resemblance to |

3. 次に形容詞を調べてみる。形容詞は動詞と異なり必ず前置詞を伴う。そして特定の前置詞を伴うことが多い (cf. 小川 (2000))。

- (9) accessible to, allergic to, anxious for, aware of, busy with, clear to,

clever {about, at}, coherent {with, to}, convenient for, curious about, empty of, exclusive of, frank with, friendly with, full of, inferior to, lacking in, pleasant to, poor in, proud of, regretful for, responsible to...for..., rich in, similar to, subordinate to, synonymous with

なお形容詞の派生名詞も、基になる形容詞と同じ前置詞を取る。形容詞は前置詞を必ず取るので、(8)における動詞と異なり派生名詞形になって初めて現われる前置詞ということはない。ofを取る派生名詞は基になる形容詞が既に of を取っている。

- | | |
|-------------------------|--------------------|
| (10) a. accessible to | access to |
| b. advantageous to | advantage to |
| c. affectionate to | affection to |
| d. analogous {to, with} | analogy {to, with} |
| e. angry at | anger at |
| f. anxious about | anxiety about |
| g. cruel to | cruelty to |
| h. dependent on | dependence on |
| i. envious of | envy of |
| j. similar to | similarity to |

4. 名詞についてはどうか。派生名詞以外の名詞について調べてみると、同様に特定の前置詞を取ることがわかる。

- (11) authority over, access to, barrier to, clue to, effort at, factor in, faculty {for, of}, gift for (才能), gift to (贈り物), impulse to, inter-course with, martyr {to, for}, matter with, monument to, obstacle to, occasion for, practice in, prelude to, pride in, program for, quest for, queue for, raid on, reason for, replica of, remorse {of, over}, safeguard against, skill {at, in}, stranger to, synonym for

名詞については、動詞と形容詞と対照的な点がある。名詞の場合は、後だけでなく前に生ずる前置詞も特定のものを取ることがある。

(12) on campus, at college, in flower, on impulse, (on, in) the list, in the middle of, in need, on occasion, in office of, on the piano, in pig-tails, on the pill, for pleasure, with pleasure, at rest, at the risk of, (on, in) the street, in time, on time, in possession of, in a... style, in a...voice, in August, in 2001, in summer

5. 以上挙げた前置詞の選択は、英語を母語とする人であれば、その言語知識の中に含まれている。このことは、辞書を見ると明らかである。多くの辞書は、ある語がどんな前置詞を伴うのかを示している。つまり語が与えられたならば、自動的に前置詞が決定されるのではない。たとえば、*Collins Cobuild English Guides 1 Prepositions* は、次のように示している。

- (13) a. be content **with** something
b. continue **with** something
c. be hazardous **to** someone or **for** someone
d. **for** someone's consumption
e. **on** a par **with** something

学習用の英和辞書においても、もちろん示されている。このことは、これらの語を用いる時、前置詞が必須の知識であることを証明している。

6. 問題は、辞書におけるように、ひとつひとつの語彙項目にそれぞれの前置詞を明記しておけばそれで英語を母語とする人の言語知識を適切に表しているのかということである。もし予測できる部分があればいちいち述べることはいらぬし、語彙項目における余剰性がうまくとらえてられてないことになる。この問題の一部は生成文法の枠組みの中では「項構造の受け継ぎ」という形で扱われることになるであろう。たとえば Ito (1991) においてのように。しかしここでは事実の記述に集中することにする。今までの例を眺め

るだけでも予測できる部分があることが明らかである。(5)(6)(10)が示すように、動詞と形容詞の派生名詞は、基になる動詞と形容詞が選ぶのと同じの前置詞を伴う。これらの派生名詞の前置詞をいちいち覚えておく必要はないのである。また前置詞を取らない動詞(7)は、一般にその派生名詞は of を伴う。これも個別に覚える必要はない。ただし(8)のように例外と思われるものが存在する。これは個別に覚えなければならないだろうか。これらの動詞がある共通の意味特性を持つことを小川(1999)で明らかにした。それゆえまったく個別的なものではない。個別に覚える必要がないことが後で明らかにされる。

派生名詞について述べたことは、(1)のように前置詞が動詞から離れて存在する時も当てはまる。

- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| (14) a. allocate...{for, to}... | allocation of...{for, to}... |
| b. appeal to...for... | appeal to...for... |
| c. congratulate...on... | congratulations to...on... |
| d. depend on...for... | dependence on...for... |
| e. thank...for... | thanks to...for... |

変種として、派生名詞において、動詞のすぐ後の目的語に対応する要素が落ちてしまう場合がある。しかし前置詞は変わらず同一である。

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| (15) a. excuse...for... | excuse for... |
| b. liberate...from... | liberation from... |
| c. trouble...with... | trouble with... |
| d. warn...(of, against)... | warning {of, against}... |

7. ただし前述したように、(8)の例は他の例と比べると特異である。もともと動詞が前置詞を伴わないにもかかわらず、その派生名詞が of 以外の前置詞を取り、予測が簡単にできないのである。このとき、予測性はゼロになるのであろうか。実はその中に予測ができるものが存在する。次の例を観察してみよう。

(16) a. allure	be alluring to	allurement to
b. contradict	be contradictory to	contradiction to
c. help	be helpful to	help to
d. obey	be obedient to	obedience to
e. obstruct	be obstructive to	obstruction to
f. offend	be offensive to	offense to
g. regret	be regretful for	regret for
h. resist	be resistant to	resistance to
i. thank	be thankful to	thanks to

これらの動詞は前置詞を取らないが、その派生名詞が取る前置詞は、その動詞に対応する形容詞が取る前置詞と同一である。

この種のグループの中に特殊なものがある。(16)では動詞の主語と目的語の関係は、それに対応する形容詞でも派生名詞でも保持される。たとえば、*X contradicts Y. ~ X is contradictory to Y. ~ X's contradiction to Y* が成り立つ。ところが、派生名詞が意味上動詞の受け身形に対応するものがある。つまり *X* と *Y* の関係が逆転してしまうことがある。いわゆる「心理動詞」である (cf. Chomsky (1970); Rozwadowska (1988); 影山 (1996))。

(17) a. amaze	be amazing to	
	be amazed at	amazement at
b. fascinate	be fascinating to	
	be fascinated with	fascination with
c. interest	be interesting to	
	be interested in	interest in

このことは、次のような動詞についても成り立つ。

(18) a. addict...to	be addicted to	addiction to
b. alienate...from	be alienated from	alienation from
c. devote...to	be devoted to	devotion to
d. marry	be married to	marriage to

e. prejudice...against be prejudiced against prejudice against

8. いままで派生名詞の取る前置詞が基の動詞や形容詞の取る前置詞から多くの場合予測できることを述べてきた。それでは、派生名詞以外について余剰性が存在しないだろうか。それを見つけてみよう。まず動詞とその形容詞形は同一の前置詞を伴う。

- (19) a. thank...for be thankful to...for
 b. busy...with be busy with
 c. conduct to be conductive to
 d. depend upon be dependent upon
 e. differ from be different from

前置詞を取らない他動詞と連関する形容詞が存在する。これらの形容詞は of を取る (cf. Hornby (1956))。これは前置詞を取らない動詞(8)の派生名詞が of を取るのとパラレルである。

- (20) a. Your work is deserving of praise. (deserve)
 b. They are envious of their neighbors. (envy)
 c. The cost is exclusive of meals. (exclude)
 d. You are forgetful of the fact. (forget)
 e. She is scornful of material things. (scorn)
 f. Haste is productive of error. (produce)

他に挙げると、

- (21) characteristic of (characterize), expressive of (express), illustrative of (illustrate), imitative of (imitate), inclusive of (include), indicative of (indicate), observant of (observe), sensible of (sense), representative of (represent), revelatory of (reveal)

この (20) と (21) と対照的に、すでに述べた (16) のような形容詞がある。(16) の形容詞は、前置詞を伴わない動詞と連関しているのに of ではなくそれ以外の前置詞を取っている。(16) と (20)–(21) を区別する要因は何なのか、いま

のところ明らかでない。これは(8)の動詞の派生名詞についてと同じ種類の問題である。動詞については、小川(1999)で、なぜ of を取る派生名詞とそれ以外のものが分かれるのか説明を試みた。

以上の分析によって、動詞・形容詞・名詞と異なる品詞間でも基底が同じであれば、同じ前置詞を取ることが明らかになった。また of が他の前置詞が生じないところで生起する役割を持っていることも示された。

9. ところが品詞が異なると違った前置詞を取ることが、少数であるが存在する。

(22) a. desire	be desirous of	desire for
b. envy	be envious of	envy {for, of}
c. hope for	be hopeful {about, of}	hope {for, of}
d. regard	be regardful of	reagard for
e. respect	be respectful {of, to}	respect for
f. scorn	be scornful of	scorn {for, of}
g.	be synonymous with	synonym {for, of}
h. replace...with...		replacement for

(22)の of は目的格を示すが、派生名詞と一緒に of を用いると of のつぎの要素が主格にとられる可能性が出てくる。

- (23) a. the scorn of his neighbours
 b. the envy of his classmates
 c. Tom's envy of his brother

(23a)(23b)は「隣人が軽蔑すること」と「級友たちが妬むこと」という意味を持つ。それゆえ of のかわりに envy for, scorn for が使われるのではないか。(23c)では Tom's によって主格が示されているので、of であっても目的格であることは明らかである。

また (22g)(22h)は、派生名詞が持つ2つの意味である「行為」と「結果」に関係しそうである。「結果」のほうは、「もの」を示し普通の名詞に近い。

(22g) (22h) はそれぞれ「結果」すなわち「同義語」と「代替品」を意味する。島村 (1990: 103) は他の人の研究を土台にして、さらに自分でも調べ、「結果名詞は動詞の項構造を受け継がないと結論すべきである。」と結論づけている。もしそうであれば、元の synonymous, replace と異なる前置詞を synonym と replacement が持つのは、納得できる。それゆえ派生名詞の伴う前置詞に関しては、「行為」と「結果」の意味の観点から見る必要がある。これについては、別の機会に調べてみたい。

さらに in で始まるイディオム的な表現においても他の前置詞が of に代えられてしまうことが生じる。(24d) はそのままである。

- | | |
|-------------------------------|-----------------|
| (24) a. aid {for, to} | in aid of |
| b. chase {for, of} | in chase of |
| c. defense {against, for, of} | in defense of |
| d. diference to | in diference to |
| e. need {for, of} | in need of |
| f. search {for, of} | in search of |
| g. support for | in support of |

10. 今までは、基体とその派生形が同一の前置詞を伴うことを示した。それでは同じ品詞の語どうしではどうなのか。調べてみると、語の意味が類似していれば、取る前置詞は同一になる。まず動詞を観察してみよう。同じグループに入るのに、前置詞を伴わない他動詞になる場合もある。() はあってもなくてもよい任意の場合を示す。

- (25) (突く) jab (at), poke (at), prod (at), thrust (at); (くつつく) add to, adhere to, adjoin (to), attach to, cling to; (戦う) battle against, fight (against), war against; (一致する) accord with, agree with, coincide with, correspond with; (異なる) differ from, diverge from; (追う) chase (after), follow (after), pursue (after); (望む) desire, hope for, long for, wish for, yearn for; (求める) aim for, ask for, hunt

for, look for; (依存する) count on, depend on, hinge on, rely on; (議論する) argue (about), debate (about), dispute (about), discuss [ただし派生名詞は discussion about]; (結合する) combine with, connect with, link with

名詞も同様に意味が類似していれば、同じ前置詞を取る。(26)は後に付く前置詞の例で、(27)は前に付く例である。

(26) (糸口) clue to, key to, secret to; (授業) class in, course in, lesson in; (練習) drill {for, in, on}, exercise in, practice in; (解答) answer to, solution to, resolution to; (返答) answer to, reply to, response to, rejoinder to; (支配) control over, dominion over, jurisdiction over, power over; (障害) barrier to, hindrance to, hurdle to, obstacle to, obstruction to

(27) (上端・下端) at the bottom of, at the top of; (端) on the brink of, on the edge of, on the verge of, on the margin of; (始まり) at the beginning, at the commencement, at the onset, at the start; (言語・語・声) in Japanese, in French; in a word, in other words, in terms of; in a low voice, in a whisper; (身につけるもの) in a blue clothes, in a hat, in a pinafore, in elegant high-heeled shoes, in dark trousers

形容詞についてもこれは当てはまる (cf. 小川 (2000))。

(28) (異なる) different from, diverse from, divergent from; (上手・下手) clumsy at, excellent at, good at, handy at, proficient at, weak at; (感謝) grateful to... for..., thankful to...for...; (後悔・残念) regretful for, repentant for, sorry for; (いっぱい・ない) devoid of, empty of, full of, short of; (確信) (un)certain of, confident of, convinced of, (un)sure of; (従属) obedient to, subject to, subordinate to; (対立) contradictory to, contrary to, opposed to, opposite

to; (近接) adjacent to, close to, near to, contiguous to; (知っている) acquainted with, familiar with

以上の例から明らかなように、どの語彙範疇においても意味が似ていれば、伴う前置詞は同じになる。派生名詞もその中に含まれ、派生名詞とその他の名詞の間には区別がない。

11. さらにいえることは、意味が類似していれば、語彙範疇がなんであれ、同じ前置詞を伴う。例をみてみよう。動詞、形容詞、名詞の順序で挙げてある。同じ要素を土台とする派生形が同一の前置詞を取ることは既に明らかにしたが、以下の例では派生形も参考のため入れてある。ただし今までに明らかにしたように、動詞の中には、前置詞を取らないものがある。しかしその派生名詞形は似た意味を持つ他の語と同じ前置詞を伴う。

(29) (感謝) appreciate, thank...for; be thankful to...for, be grateful to...for; appreciation for, gratitude to...for, thanks to...for (接近) approach, near; be close to, be near (to); access to, approach to (類似) resemble; be akin to, be analogous to, be similar to, be close to; resemblance to (等しい) be equal to, be equivalent to, be identical to (障害) hinder, obstruct; be obstructive to; barrier to, hindrance to, hurdle to, obstacle to, obstruction to (試み) attempt, endeavor, try; attempt at, effort at, endeavor at, try at (望む) ache for, desire, hope for, itch for, long for, wish for, yearn for; be hungry for, be thirsty for; desire for, hope for, hunger for, thirst for, wish for, yearning for (追求・探す) hunt for, look for, quest for, search for; hunt for, quest for, search for

結局、最終的な原理は、次のようになる。

(30) 語の意味が類似していれば、語彙範疇がなんであれ同じ前置詞を選択する。

派生名詞が基の動詞と形容詞の取る前置詞を伴うのはこの原理から自然に説

明される。意味が同じであるからである。そうするとたとえ動詞が前置詞を取らない他動詞であってもその派生名詞が取る前置詞は予測できることになる。同じ意味を持つ他の語の伴う前置詞からわかるからである。たとえば動詞の hinder や obstruct は他動詞であって前置詞を取らないがその派生名詞の hindrance と obstruction は to を伴う。これは同じような意味を持つ barrier や hurdle が to を取ることから予測できる。

12. 以上本稿では、動詞・名詞・形容詞を運用できるためには、(1) それらが伴う前置詞の知識が必須であること、(2) 前置詞の選択は語の意味から予測でき、個別に覚える必要がないこと、また(3) 前置詞の選択には 語彙範疇は関係ないことを示した。

ここから出てくる問題のひとつは、たとえば、なぜ「接近」「類似」「等しい」「障害」が共通に to を取り、「望む」「探す」が for を共通に取るのかということである。なぜ意味のちがいにもかかわらず同一の前置詞を取るのか。これについては、機会を見つけて、Lindstromberg (1998)、Faber and Uson (1999) や認知言語学などを手がかりに調べてみたい。

参考文献

- Celce-Murcia, Marianne and Diane Larsen-Freeman (1983) *The Grammar Book: An ESL/FEL Teacher's Course*, Newbury House Publishers, Rowley.
- Celce-Murcia, Marianne and Diane Larsen-Freeman (1999) *The Grammar Book: An ESL/FEL Teacher's Course*, 2nd ed., Newbury House Publishers, Rowley.
- Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," *Readings in Transformational Grammar*, ed. by R. Jacobs and P. Rosenbaum, 184-221, Ginn and Company, Waltham, MA.

- Faber, Pamela B. and Ricardo Mairal Uson (1999) *Constructing a Lexicon of English Verbs*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Hornby, A. S. (1956) *A Guide to Patterns and Usage in English*, 研究社出版.
- Ito, Takane (1991) "C-selection and S-selection in Inheritance Phenomena," *English Linguistics* 8, 52-67.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版.
- Lindstromberg, Seth (1997) *English Prepositions Explained*, John Benjamins, Amsterdam.
- 小川 明 (1996) 「派生名詞と前置詞に関する試論」『東京家政大学研究紀要』36 (1) 人文社会科学, 143-149.
- 小川 明 (1999) 「動詞に伴う前置詞—意味から見た統語現象」稲田俊明他編『言語研究の潮流』83-96, 開拓社.
- 小川 明 (2000) 「形容詞に伴う前置詞」『東京家政大学研究紀要』40 (1) 人文社会科学, 181-187.
- Rozwadowska, Bozena (1988) "Thematic Restrictions on Derived Nominals," *Syntax and Semantics 21: Thematic Relations*, ed. by Wendy Wilkins, 147-165, Academic Press, New York.
- 島村礼子 (1990) 『英語の語形成とその生産性』リーベル出版.
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較—動詞の文法—発想の違いから見た日本語と英語の構造』くろしお出版.